

財団法人東方研究会／東方学院

東方だより

第十五号

【本部(東京本校)】
〒101-0021
東京都千代田区外神田2-17-2
延寿お茶の水ビル 4階
TEL 03-3251-4081
FAX 03-3251-4082

【東方学院関西地区教室】
〒533-0033
大阪府大阪市東淀川区東中島
5-27-44 崇禪寺
TEL 06-6322-9309
FAX 06-6321-7695
URL <http://www.toho.or.jp>

理事長ご挨拶

前田 専學



二〇一〇年は、私どもにとりまして、大変に素晴らしいニュースで幕が開きました！

当研究会の西村玲研究員が、「日本学術振興会賞」の受賞者に決定したという快挙の知らせが飛び込んで来たのです。本賞は、全国の大学等研究機関や学協会から推薦された人文社会系・理工系の各分野を代表する、四十五歳までの若手研究者三百六十四名の中から、優れた業績をあげた二十五名に与えられる賞です。しかも西村研究員は受賞者のうち上位六名だけに与えられる「日本学士院学術奨励賞」をも与えられます。いかに名誉なことであるか、お分かりいただけるかと思えます。

西村研究員の研究は、「日本近世(江戸時代)の独創的な仏教思想家であり実践者であった普寂(一七〇七-一七八一)の思想を分析し、従来の研究では形骸化した思想として軽視されがちであった近世仏教思想に対して、新たな視点から再評価を行った」ものとして、その顕著な業績が認められました。

今回の受賞者を見ますと、東大・京大などの教授・准教授ばかりで、私立の財団法人の研究員というのはいずれも西村研究員ただ一人です。以前にも申しましたが、人文系、とくに虚学の代表と目されてきた私どものインド学・仏教学の領域では、多くの優秀な研究者が博士号をとっても、なかなか専任職が得られません。中村先生が私財をなげうって東方研究会を設立されたのも、まさにこの問題を解決するためでもありました。当研究会では、すでに八十余名に上る斯学の若手研究者を育成し、学界に送った実績をもち、現在も十数名の有望な博士研究員を擁しています。

財団法人東方研究会の設立の目的は、若手研究者の育成のみならず、東洋思想の研究とその成果を東方学院などを通じて普及し、社会に還元することにあります。本年もこれらの諸目的の実現を通じて、最大限公益に資するよう努力して参る所存であります。

第十五号 目次

理事長挨拶 三頁

第十九回中村元東方学術賞授賞式
第一回神儒仏三教合同シンポジウム等
東方学院講師紹介
研究会員の声
研究員紹介
東方学院新規講座のご案内／「閑話本題」
財団法人東方研究会からのお知らせ

1	頁
2	頁
3	頁
4	頁
5	頁
6	頁
7	頁
8	頁

西村玲研究員が日本学術振興会賞 日本学士院学術奨励賞を受賞



当研究会の西村玲(にしむらりょう)研究員が、第六回日本学術振興会賞を受賞することが去る一月二十七日に決定いたしました。授賞式は三月一日に東京都台東区の日本学士院で行われ、西村研究員は受賞者の中でも特に優れているとして、

日本学士院学術奨励賞も併せて受賞します。日本学術振興会賞は、日本学術振興会が、将来の学術研究のリーダとして、後のノーベル賞候補者となるようなフレッシュな研究者をいち早く顕彰することにより、今後の研究にチャンスを与え、ブレークスルーを促すことを目的に設けているもので、今回はノーベル賞受賞者江崎玲於奈先生、野依良治先生などにより構成される審査会で選ばれました。

西村研究員の研究は『近世仏教思想の独創―僧侶普寂の思想と実践―』(二〇〇八年五月、トランスビュー刊)と題した著書にまとめられています。この中で西村研究員は、日本仏教の創造的な時代は中世までで、近世においては墮落と衰退の道をたどったという定説に疑問を投げかけ、普寂が世俗的知識人からの世俗化・非宗教化の動きに抗して、仏教の内なる近代化を準備しつつ、宗教性を復権させようとした過程を生き生きとした筆致で描き出しています。

西村研究員は一九七二年東京都生まれ。東北大学文学部から同大学院文学研究科に進み、二〇〇四年に博士(文学)の学位を取得。同年から財団法人東方研究会の研究員を務めています。今回の受賞について、「なにかもう、自分のことと思うと恥ずかしくて、ずっといたたまれませんでした。普寂律師と東方研究会が受賞したのだと気付きました」と、謙虚に、チャーミングに語っています。

行事報告

平成二十一年下半年(七月〜十二月)

第十九回 中村元東方学術賞授賞式



当研究会の創立者である中村元博士が顕著な功績のある研究者を顕彰することを目的として設立した中村元東方学術賞の第十九回(平成二十一年度)授賞式が、中村博士の命日である十月十日(土)、東京都千代田区の新装成ったインド大使館のオウディトリウムにおいて行われた。宮元啓一博士(国学院大学教授)に中村元東方学術賞、渡邊寶陽博士(立正大学名誉教授)に東方学術特別顕彰が贈られた。

授賞式には、駐日インド大使 H・K・シン閣下のご臨席のもと、約百名の出席者を得て開催された。式では奈良康明常務理事発声による「三帰依文」が唱和された後、中村博士の遺徳を偲び黙祷が捧げられた。前田専學選考委員会委員長からの審査報告に続いて、当研究会及び駐日インド大使館より、それぞれ賞状と記念品の授与が行われた。来賓を代表して、丸井浩東京大学大学院教授、望月兼雄日蓮宗東京都北部宗務所長による祝辞のあと、受賞者の祝辞が述べられた。

式の終了後、引き続きインド大使館において両博士を囲みながらインド料理による盛大な祝賀会が催された。田中ケネス武蔵野大学教授、吉田宏哲立正大学名誉教授が両博士との思い出などを語り受賞に花を添えた。

駐日インド大使

H・K・シン閣下のお言葉

東方研究会理事長前田専學博士、東方研究会常務理事奈良康明博士、国学院大学教授宮元啓一博士、立正大学名誉教授渡邊寶陽博士、ご列席の皆様。本年度の中村元東方学術賞の授与式をこのインド大使館の新しい施設で行えますことは、インド大使館にとり大変な光栄と存じます。まず、中村先生への深い尊敬と共に、中村先生が日印両国と、その国民相互のより深い文化的な相互理解のために、達成された業績について回想したいと思います。先生はヒンドゥー教の経典及び、仏典に関する広い知識と、精通されていたサンスクリット語、パーリ語を駆使なさって、日本におけるインド哲学研究者たちに奮起を促しております。



一九七〇年、中村先生によって設立された東方研究会は、東方思想と文

化の学びの場として発展してきました。東方研究会は卓越した学問の追究を以て、およそ四十年の長きにわたり、インド哲学研究を前進させてきました。

本年度の中村元東方学術賞の受賞者である宮元啓一博士に心からのお祝いを申し上げます。宮元博士は中村博士とともに仕事をなさる機会を得ました。宮本博士の『勝宗十句義論』の研究は、中村先生の真の伝統を受け継ぐ画期的な著作です。宮元博士は関連するサンスクリット語の文献と漢訳の精査を通じて、サンスクリット原本の再構成という成果を残されました。

ここで、宮元博士のインド哲学に対する多大な貢献を表彰し、インド政府文化交流委員が実施しております Visitors Program を通じて、宮元博士をインドにご招待したいと存じます。

また、本年度の東方学術特別顕彰の受賞者でいらっしゃる渡邊寶陽博士に心からのお祝いを申し上げます。渡邊博士の『法華経』に関する研究は大変幅広い評価を受けています。渡邊博士のご専門は、日蓮以来の分野にも及び、渡邊博士は日本の仏教学者の指導者として精力的に活躍して来られました。

ご列席の皆様、日印両国の長きに渉る友好関係は、一四〇〇年前に仏教が渡来したときから始まりました。この友好関係は絶え間ない思想の交流を経て、両国の文明を豊かにしてきました。この基盤の上に両国が精神的な遺産を共有することにより、長きに渉る友情を更に強化することを望みます。寛容の精神、調和の精神、そして、慈悲の心という、両国に共通する価値観をもってすれば、日印両国はアジアの人々、また、世界の人がどの間に普遍的な同胞愛を広めることが出来ま

す。最後にになりましたが、日印両国の文明の交流という生きた伝統を継承する学問の促進への計り知れない貢献に対し、東方研究会に再び賞賛の辞をお贈りしたいと思います。また、東方研究会がその崇高な探求を継続するために指導に当たっておられる前田専學博士に心からの感謝の念を捧げます。ご静聴ありがとうございます。

宮元博士の謝辞

宮元啓一博士は、高校時代図書館で中村元先生の本と出会い、インド哲学・仏教学を志すようになったという。中村先生の本が高校の図書館にあったというのが奇跡そのものだったとエピソードを語った。中村先生からは「インド学はエジプト学であってはならない。生きた学問として自ら考えたものを世に問うことが本当の学問である」と教わったため、今後



も生きた哲学、生きた思想を究めていきたいと抱負を語られた。

【略歴】昭和二十二年生まれ。東京大学文学部印度哲学印度文学科卒業。博士(文学)。現在、国学院大学文学部教授。東方学院では「インド哲学の探求」を現在開講中。

【著書】『インド死者の書』、『牛は実在するのだ! インド実在論哲学「勝宗十句義論」を読む』、『ブツガが考えたこと! これが最初の仏教だ』、『シリーズ・インド哲学への招待』(全五巻) など多数。

渡邊博士の謝辞

渡邊寶陽博士は、僧侶になるつもりで大学で勉強をしていた。大学院に行く必要はないと言っていた父親を指導教授が説得してくださり、そこから人生が始まったと述懐された。この受賞を励ましと受け止め、やり残している研究を頑張りたいと決意を述べられた。



【略歴】昭和八年生まれ。立正大学仏教学部宗教学科卒業。文学博士。現在、立正大学名誉教授。東方学院では「法華経を読む」を現在開講中。

【著書】『日蓮宗信行論の研究』、『日蓮仏教論―その基調をなすもの』、『ブツガ―永遠のいのちを説く』など多数。

第一回神儒仏三教合同シンポジウム



八月八日(土)、文京区の湯島聖堂斯文会館講堂において、宗教法人神田神社(神田明神)、財団法人斯文会(湯島聖堂)、そして財団法人東方研究会は、多数の参加者のもと「第一回神儒仏三教合同シンポジウム」を開催した。

が、今回のテーマ「他者への関心」秋葉原無差別殺傷事件を受けて」についてそれぞれの立場で講演が行われた。その後、当研究会の水上文義研究員をコーディネーターとして、会場の参加者との質疑応答も含めて活発な討議が交わされた。質疑応答は徳川氏に代わって、石川忠久氏(斯文会理事長)が参加された。

なおこれに先立つ六月二十五日(木)斯文会館講堂において記者会見が行われた。TBS、共同通信、毎日新聞、サンデー毎日、中外日報、仏教タイムスなど、集まった多くの報道機関の記者にむけて、前田専理理事長(東方研究会)はじめ、清水祥彦禰宜(神田明神)、石川忠久氏(斯文会)の三つの団体からシンポジウムを立ち上げる理由が説明された。



斯文会(儒教)からは徳川恒孝氏(財団法人徳川記念財団理事長)、神道からは石井研士氏(国学院大学教授)、仏教からは竹村牧男氏(東洋大学教授)

「ナマステ・インディア二〇〇九」に参加



九月二十六日(土)二十七日(日)、東京の代々木公園内で開催された「第七回ナマステ・インディア」に「中村元インド哲学カフェ」のブースを開店。このイベントは日本とインドの相互理解を深める文化交流イベントであり、当研究会は今年で三回目の出展となる。インド文化に触れてもらうことを目的として、様々なワークショップを開催した。東方学院の的場裕子講師が会場中央舞台で南インド音楽を演奏し、来場者にインド楽器の手ほどきをした。また、曼荼羅のワークショップでは田中公明研究員が曼荼羅を使って、その成立や伝播についてレクチャーを行った。さらに、自分の名前を梵字で書いてみる体験ワークショップ「インド文字カリグラフィ」のワークショップでは、インドの衣服に身を包んだ若手研究員たちの説明に熱心に耳を傾けながら、梵字を書き記す姿が見られた。四畳半程のテントにのべ二百人強の参加者があり、東方学院の草の根活動として仏教タイムスに記事が掲載されました。



第十四回東方学院・酬仏恩講合同講演会

十一月二十八日(土)午後、奈良市西ノ京の法相宗大本山薬師寺・まほろば会館において、同寺のご後援の下、東方学院と酬仏恩講共催で第十回目となる合同講演会を開催いたしました。講演会は前田学院長の挨拶に始まり、立花弥生研究員(東方研究会アジア諸国派遣留学生)による「『玄奘三蔵経』の背景にあるもの」『春日権現験記絵』との関連から、「奈良の寺々」と題する講演と、花園大学名誉教授である沖本克己氏による「奈良の寺々」と題する講演とが行われ、最後は薬師寺の松久保秀胤長老より閉会の辞を賜りました。また、朝日新聞、日本経済新聞の関西版、京都新聞に告知記事が掲載されました。



沖本先生のご講演の様子

東方学院 講師紹介

仏教入門

黒川 文子

(NHK学園講師)



「仏教入門」の講義は月曜日、前田専學学院長、金曜日に私、黒川が担当しております。テキストは中村元先生の『仏教をよむ』（岩波書店）を使用していますが、本書は一九八五年NHKラジオ第二放送で行われた連続講義『ころをよむ』を『仏教入門』を活字にしたものです。「仏教入門」と題した書物は数多くありますが、本書は原始経典から始まり、主要な経典のその最も重要な部分をとりあげ、仏教を学ぶための最も基本をおさえたテキストであり、仏教経典の読み方を学び、仏教思想の根本を学ぶことができます。

東方学院の門を叩く方々の中には仏教あるいはインド思想についてかなりの知識をお持ちで、「入門」は済んだとお考えになられる方もあるかと思えます。しかし、東方学院において「仏教入門」の存在意義はとても大きいのです。仏教あるいは東洋思想を学ぶ者が忘れてはならないこと、即ち中村先生、前田先生と引き継がれてきた学問に向かう姿勢、心がまえを学ぶことができるのがこの「仏教入門」です。

経典や典籍を原語で読むためには語学の知識が必須ですが、最初は中村先生始め諸先生方による原典に忠実な現代語訳によって各経典の説くところを学んで仏教全体を把握し、その上でご自身の目ざすところに邁進されることをお勧めします。できることならば語学、専門分野と並行して「仏教入門」を学んでいただけるとなお宜しいでしょう。仏像彫刻を始めとする実習部門を専攻する方々も、いえ実習される方こそ「仏教入門」を学んでいただきたいと切に願っております。

現在金曜日の授業ではテキスト『仏教をよむ』に加え岩波文庫などを参照してありますが、経典を音読して味わい、内容を考え、話し合い、必要に応じて辞書を読みながら学んでいます。鋭い質問に驚くこともしばしばですが、皆さまの主体的で真摯な勉学態度に接し、東方学院が「真に学を究め、道を求めたい人々の学院」であることを実感しております。

東方学院と私

水野 善文

(東京外国語大学教授)

明神下の明宏ビルにあった東方学院を初めて訪ねたのは、たしか一九七九年の春だったと思う。受講希望の旨を申し出ると、パンフレットを手渡しして下さったのが、現東京大学東洋文化研究所教授の丘山新先生だった。この契機は、田舎の貧乏寺で高校教師をしながら養ってくれた父が学究肌だったことによる。あれから、えっ、三十年。

八人ほどでテーブルの余地がなくなってしまうような部屋で、毎土曜日、上村勝彦先生からサンスクリット語を習い、月曜日の夕方は、当時大手町ビルにあった在家仏教協会のフロアを借りて開講されていた中村元先生の講義を拝聴した。大学に通う一方で、いわゆるダブル・スクール。あの日々がなければ、今の私もない。ある日授業の後、年長の受講者に誘われてビル階の居酒屋で初めて食べたアン肝の味は今も忘れない。まさに大人の階段を登りはじめたころ。押し上げてくれる人々に恵まれた有り難さ、時経て今痛切に思う。

インド留学から帰国した一九九二年の一月からは研究員として所属することになり、その年の四月からはサンスクリット語の講義も担当するようになった。当初は、予期せぬ質問にうるたえ、翌週までの宿題とさせていたただくこともしばしばだった。いまま、うるたえこそしないが、宿題とさせていただく癖は抜けきれない。

こちらでの授業は、本務校で三コマないし四コマをこなしたあと移動してからの二コマなので、おわり近くになると呂律も回らなくなるほど疲労困憊するが、それでも、向かう足取りが軽いのには、受講者の熱意がひしひしと伝わってくるからである。現在、中級クラスでは、かなりマイナーな説話を読んでいるが、皆さん良く予習されてこられるので、様々な解釈について対等に議論しあうことになる。こんなに楽しい授業は滅多にない。

今年のガイダンスの時、急遽思いついたことばだが、以降、私の東方学院におけるモットーにしている。「世界一難しい言語であるサンスクリット語を世界一易しく(優しく)教えます!」



研究会員の声

自灯明・法灯明

中村成



釈尊は、あの高温多湿な印度で人類にとって最高の哲理を生みだし、八十年の尊い生涯を終わられました。ここ、八十年を振り返って見ると戦争と権力争いとイデオロギーの時代であり、多くの人命がこの世から失われました。今なお民族対立や宗派戦争まで起こっています。人間は他なくして、生も死もありませぬ。

「人身受け難く、仏法遭い難し」、「世間虚仮、唯仏是真」を思量した末、師を求めてやっと私も東方学院に辿り着きました。御陰様で入門させて頂きこの上ない幸せです。最初、中村元先生には協和発酵ビルで『原人論』と『大唐西域記』を拝聴しました。ある日、私は礼も弁えず、「宗教ってなんですか」とお尋ねしますと、「傷つけないことです。アヒンサー (ahimsa) と言いますが、後は自分で考えてください」と深遠なお言葉を戴きました。一生忘れることは出来ませぬ。

中村元先生はご講義中でも、禅宗ではどうお考えですかとお坊さんに尋ねるなど低姿勢そのままで誠に頭が下がります。また、中村元先生は常にカードをお持ちになり、原語を重視され、原典をご明示して下さいました。

その後私は諸先生に『正法眼蔵』、『中論』、『法華経』、サンスクリット等を親切に教えて戴きました。現在、森祖道先生から、紀元前二世紀半ばに仏道に帰依した、ギリシア人ミリンダ王と仏教僧ナーガセーナ長老との対談『ミリンダパンハ』をパリー語原典でお教え戴いています。内容は正に仏教の宝庫です。

「もしも生存に対する執着をもっていないならば、次の世に生を結ぶこととはないであろう」という輪廻思想の根幹さえ発見されます。

無常、苦、無我の本意を求めた古人の真剣さに打たれます。なお難解な「いろは歌」も森祖道先生にパリー語でお教え戴きました。今後も立派な先生方と学縁の良友を師とし、人間釈迦がベールヴァ林で発病の際、阿難に教えた「自灯明・法灯明 (attadipa・dhammadipa)」を深く祈念します。

集中講義で学ぶ

平賀重司郎

四年前から東方学院の集中講義を受けております。はじめは佐久間先生の「アジアの芸術と文化」。中でも最初期のインド仏教美術並びにガンダーラ仏教美術は、私にとって最も興味深かったものでした。その造像様式の変遷、それが平面にしる立体にしる、それらがその地方・その時代等々と深くかわりながら、その頃のその地方ならではの仏の姿を生み出しているのだと理解され、従って言われている「作品には生み出した人の生活なり思想なりが滲み出る」という言葉が此処にも当てはまると改めて思い起こされるのです。仏伝表現にも本生物語表現にも独尊表現にも三尊形式にも、或いはテーマを持つものも持たないもの、何れにしても皆それぞれ条件により互いに共通項を持ちながらも異なったニュアンスを表現していると見受けられます。これ等の講義に豊富な資料をプリントして下さいたり、貴重な書籍を見せて下さったりの懇切な講義に感謝致します。



その後受けた集中講義は保坂先生の「インド仏教の衰亡」に関する講義。かなり以前から私の中に引掛かる二つの言葉があり、一つは或る牧師さんが私に言った言葉「仏教ってあれは宗教ですかね」。もう一つは或る仏教学者の著書中の言葉「：仏教は一風変わった不思議な宗教である。：或る意味では宗教らしからぬ宗教で：」。この二つが薄れながらも心の何処かにあった。その後、保坂先生の仏教衰亡に関する所説を図書館で知り、こういう角度からの入口がもしかしたら解く鍵に、と思つてこの講義を受けたのです。この講義はかなり複雑な流れを呈するのですが、私の注意を惹いたのは、仏教徒の改宗という語。此処に案外鍵があるのでと思つ、今受講中です。

充分な資料を戴き、少人数にかかわらず細部に及ぶ講義感謝致します。尚、両先生の講義を受けながら、私達は随分贅沢な講義を享受しているものだと思うことがしばしばでございます。

富山県利賀村の曼荼羅の郷を訪ねて

平成二十一年七月十九日(日)、二十日(月)、田中 公明講師クラスの研究会員を中心に、富山県利賀村の「瞑想の郷」に曼荼羅の見学旅行に行きました。



研究員紹介

私の入った頃の東方研究会

吉野 恵子



私が初めて研究会にお世話になったのは昭和五十二年。御茶ノ水駅から聖橋・湯島の聖堂・神田明神という道筋は以前から憧れを覚える地でした。さらに本殿の脇にある銭形平次の記念碑を見て、文字通り明神下にあるビルにたどり着くのは、何か楽しい気がしました。

中村先生は有名でしたが、研究会の規模は小さく、人も少人数でした。しかし、先生がいらっしゃる所為か、集まってくる人が皆魅力ある人に思えました。行事がある度に、金魚のフンのように先輩の後について行き、そのやり取りを聞くのも何かワクワクする様な楽しいものでした。何年間か先生の大手町の講義にお供をさせて頂いたのですが、受講生の方々とも親しくさせて頂きました。今も新春会でお会いするのですが、長い方はもう三十年来の知己になっていきます。

東方研究会の魅力は、やはり、中村先生にお目にかかれることでした。先生は在家の学者なのですが、ふと気づくと、熱心な信者や厳しい修行を志す人よりも仏教に適った生活や生き方をしていらっしゃるよう見ええました。殊更には何かを掲げるのではなく、自然に身に付けていらっしゃる。種々な面で見えました。見かけはごく普通の方なのですが、一つ一つ思い返すと、それまでに会ったことのないような、不思議な方に見えます。

研究会でさせて頂いた中で深いのは、竹下登さん(元首相)の創政会の雑誌『創政』に聖徳太子についての原稿を書くことになったことです。世の中を見通すなど、政治家の持つべき能力とはどんなものか見当もつかなかったのですが、政治家の志すものには興味がありました。あの頃は、理想を見定めれば実現の方向に歩み出すことは可能だと思っていたのですが、今は現実の制約が重く押し掛かっているように思えます。二十一世紀を迎えて以来、世の中の動きに苛立ちを覚えていましたが、近頃は無力感を覚えています。今は政治家達が、挫折することなく、的確な方策を練ってくれることを切望しています。

私を導いた本

北田 信

私の手元に、一冊の本があります。タイトルは「NHKこころをよむ 仏典」つまり昭和六十年四月に中村先生が講師として受け持っておられたNHKラジオ講座で、毎回、原始仏典から大乘仏典までのさまざまな経典を一つ選んで、その名場面を講談する、という番組のテキストです。当時私は中学生でした。ちょうどテレビでドキュメンタリーシリーズ「シルクロード」が放映されていて、それまで欧米かぶれだった日本人が、アジアの文化の素晴らしさを再発見し始めた時期でした。ちょっと変な子供だった私は、普通の子供がアニメのヒーローに親しむのと同じ感覚で、古代エジプトのファラオとか、古代ギリシャの英雄たちの伝説を読んでいたわけですが、あるとき、学研マンガの偉人伝記シリーズの「おしやかさま」を読み、シッゲールタのかっこいい生き方に惚れこんでしまったのです。それから岩波文庫の中村先生訳の原始仏典「真理のことば」や「ブツダのことば」などを読みあさるようになりました。もちろん子供供ですが、深遠な仏教思想を理解しえた、とは到底言えません。でも、中村先生の翻訳には難しい漢字がひとつも使われておらず、小中学生にも分かるような、たいへんやさしい文章になっていました。このやさしい文章が、それからの私の生きる指針となりました。中村先生が出演されるテレビ番組も、毎回楽しみにして見ていました。特に心に残っているのは、中村先生がインド旅行に行かれて、駅で列車に乗り込まれるときに、売店で仏陀の伝記を描いたマンガを買って、お顔をくしゃくしゃにして喜んでいらつしゃった姿です。残念ながら生前お目にかかることができませんでした。以上のようなことがきっかけとなり、私はサンスクリットなどのインドの諸言語の研究の道に進むことになりました。幸い丸井浩先生のご推薦により、東方研究会に入れていただくことができました。なんだか中村先生ご自身に助けていただいたかのような気さえして、なんとも不思議なご縁です。



趣味の弦楽器サロードを弾く

現在は、研究活動に並行して、関西西部局の研究員の皆さんと一緒に公開講座「インド哲学カフェ」という催しを行っています。人民による人民のためのインド哲学を皆で楽しむ、というものです。このようにして中村先生の「寺子屋」の精神を受け継いでいきたいと思えます。

2010年度 東方学院新規講座のご案内

来たる4月より東方学院の新年度が始まります。2010年度からは左記の各講座が新たに開講されます。各種講座の詳細やお申込方法などは『手引き』またはホームページにてご確認下さい。なお、2008年度より、受講料の払込手数料を払込者負担に変更させて頂いております。それに伴い、**払込用紙が従来の赤色のものから青色の用紙に変更となりました**ので、お申込の際はご注意願います。また、ATMでの処理をおすすめいたします。

《東京本校》

「陰陽の宇宙論と東アジア」

【火曜・初級】

鈴木一馨 講師

「パース語入門」

【水曜・初級】

馬場紀寿 講師

「近代インドの哲人

シユリー・オーロピンドの生涯と思想」

【水曜・初級】

山口泰司 講師

《関西地区教室》

「アーユルヴェーダ文献講読」

【木曜・中級】

北田信 講師

「仏教入門」

【土曜・初級】

《月一回》
関西地区教室講師陣

「インド古典と美術」

【日曜・初級】

《第二・四日曜》
平岡昇修 講師

平岡三峰子 講師

「漢文仏典講読」

【七月上旬・初級】

《集中講義》
末木文美士 講師



末木講師



平岡三峰子講師



平岡昇修講師



北田講師



山口講師



馬場講師



鈴木講師

遠隔作用と近接作用

細野邦子(研究員)



インド思想に西洋思想と類似する概念を見つけないことは楽しい。インドの哲学学派において、視覚器官(目)は対象に接触して視覚を生じさせるのか、あるいは対象に接触せずに視覚を生じさせるのか、という議論がある。二ヤーヤ学派のテキスト『二ヤーヤ・

研究員のコラム 第5回 閑話 本題

「両者を同時に見る」。したがって、視覚器官は対象に接触せずに視覚を生じさせる(透視する)ことができるであろう。しかし対象を見ることはできない。したがって、視覚器官は対象に接触して視覚を生じさせる(遠接作用)し、前者を先に後者を見ることになるであろう。しかし前者を後に見ることはない(両者を同時に見る)。したがって、視覚器官は対象に接触せずに視覚を生じさせる(遠接作用)し、前者を後に見ることはない(両者を同時に見る)。したがって、視覚器官は対象に接触せずに視覚を生じさせる(遠接作用)し、前者を後に見ることはない(両者を同時に見る)。

会員募集のお知らせ

財団法人東方研究会からのお知らせ

当研究会では各種会員制度を設け、随時募集いたしております。会員には、機関誌『東方』をはじめとする各種情報の提供が受けられる普通会員と、当研究会への支援を主な目的とする賛助会員、ならびに維持会員がございます。

◇ 普通会員 ◇ 年会費 7千円

普通会员の皆様には、毎年一回発行される機関誌『東方』の他、当研究会主催の各種行事および会合等に関するご案内をお送りいたしております。

◇ 賛助会員・維持会員 ◇ 賛助会費 1口 1万円・維持会員 1口 5万円

当研究会では賛助会員ならびに維持会員を募集いたしております。当研究会の趣旨にご賛同頂ける皆様からのご協力をお待ちいたしております。なお、募金の趣旨をご理解の上、できうるかぎり複数口のお申し込みを賜りたく存じます。

* 詳細は財団法人東方研究会事務局までお問い合わせください。

『東方』第25号 刊行

【主な執筆者】 (敬称略)



3月31日、当研究会の機関誌『東方』の最新号が刊行されます。今号には論考4篇・資料2篇・報告1篇のほか、第1回神儒仏三教合同シンポジウム講義録及び中村元博士東方学院講義録(『大唐西域記』を読む)などを掲載いたしております。

なお、本誌は会員(研究会員を除く)の皆様にお送りしているほか、各種研究機関・図書館等にも納められています。頒布可能なバックナンバーもございますので、詳細は事務局までお問い合わせください。

- 前田 専學 (東方学院長)
- 田良 康明 (東方研究会常務理事)
- 奈恒 孝士 (徳川記念財団理事長)
- 石井 研士 (国学院大学教授)
- 竹村 牧男 (東洋大学教授)
- 定方 晟司 (東海大学名誉教授)
- 山下 博司 (東北大学教授)
- 岡光 信子 (東北大学専門研究員)
- 水越 正彦 (東方学院研究会員)
- 木村 紫和 (東方学院研究会員)
- 森田 俊和 (普通会员)

「鶴岡文庫・東方学院共催講座」開始

平成三年から鶴岡八幡宮と東方研究会とで十八年間続いてきた鎌倉夏季宗教講座は平成二十年で幕を閉じ、二十一年度からは鶴岡八幡宮鶴岡文庫主催の「教養講座」の中に「鶴岡文庫・東方学院共催講座」が設けられています。

★二十一年度は「日本仏教の巨匠たちに聴く」ブツダ・祖師たちの教えと心」と題して、左記のとおり東方研究会の講師陣が講義しました。

第一回 「ブツダに聴く」	前田専學 講師
第二回 「聖徳太子に聴く」	田村晃祐 講師
第三回 「空海に聴く」	田中公明 講師
第四回 「最澄に聴く」	水上文義 講師
第五回 「法然に聴く」	加藤榮司 講師
第六回 「栄西に聴く」	堀内伸二 講師
第七回 「叡尊・忍性に聴く」	西村玲 講師
第八回 「親鸞に聴く」	常磐井慈裕 講師
第九回 「日蓮に聴く」	森和也 講師
第十回 「道元に聴く」	奈良康明 講師

★二十二年度のカリキュラムは「現代に生きる仏教」として左記のような予定で行われます。

第一回 五月二十三日 「受容の諸相(仏教の伝来)」	奈良康明 講師
第二回 六月二十七日 「入唐(入竺)求法」	常磐井慈裕 講師
第三回 七月二十五日 「鎮護国家」	西村玲 講師
第四回 八月二十二日 「排除と習合」	水上文義 講師
第五回 九月二十六日 「布教と社会事業」	西村玲 講師
第六回 十月二十四日 「抵抗する仏教」	加藤榮司 講師
第七回 十一月二十八日 「祖先のまつり」	鈴木一馨 講師
第八回 一月二十三日 「国学と仏教」	森和也 講師
第九回 二月二十七日 「芸道と仏教」	吉村均 講師
第十回 三月二十七日 「現代社会における仏教の可能性」	前田専學 講師

*なお、申し込みは鶴岡文庫(TEL:04六七-二一九一四四)に直接お問い合わせください。

新春研究発表会 三月開催

毎年恒例の新春研究発表会が左記のとおり開催されます。

【開催概要】
日時 平成二十二年三月十五日(月) 午後四時開場
会場 東京ガーデンパレスホテル
一、講演の部(午後四時半〜六時)
上野敬子氏(独ミュンヘン大学 Ph.D.)
田中ケネス氏(武蔵野大学教授)

二、懇親会の部(午後六時〜)
表彰 西村 玲氏
感謝状贈呈 風間真一氏

東方学院では、各種講座の内容・受講料・お申し込み方法などを記載した『2010 東方学院の手引き』を配布いたしております(無料)。ご希望の場合は、事務局にお申し込みください。

編集後記

関東と関西、親子ほど離れた二人がコンビを組んで二年。沢山の関係者に支えられています。私は原稿依頼と督促だけ。後は若い西岡研究員が獅子奮迅の活躍です。二人を繋ぐのはもっぱらメールで、私が夜中に一本指かな入力で勝手なメールをどンドン送ると「早くお休みください。お体に障ります」と優しい返事が返ってきます。(三木純子)

中村先生のご息女、三木編集長の下で編集作業の一端を担っております。バイタリティ溢れる編集長から、中村先生の面影を憶んでいます。また、お会いしたことの無い講師や研究会員の方々とご縁を頂けたのが編集部での醍醐味です。未だに編集長におんぶに抱っこで二人二脚ですが、そろそろ脚を下ろさないと振り落とされそうです。(西岡秀爾)

東方だより 第十五号 平成二十二年三月一日
編集/発行 財団法人東方研究会
【東京本校】〒101-0021
千代田区外神田二丁目一丁目一丁目一丁目一丁目
TEL:03-3251-1408